

大友宗麟の実像

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第5回 ヨーロッパ人からみた宗麟

大友宗麟公像
(JR大分駅前)



1551(天文20)年9月、キリスト教の布教活動のため日本(山口)に滞在していたフランシスコ・ザビエルは、大友宗麟の招きに応じ豊後府内の大友館を訪ねます。

イエズス会創設者の一人であったザビエルと宗麟の会見は、日本での本格的なキリスト教布教の幕開けとなる出来事であり、日本とヨーロッパの道が初めて開かれた瞬間でもありました。

2人のこの歴史的な出会いはセンセーショナルな史実としてヨーロッパに伝えられたようです。

左の写真は、17世紀前半に描かれた西洋画で、「豊後大名大友宗麟はいに拝謁する聖フランシスコ・ザビエルえつ」のタイトルが付けられています。この絵の舞台は言うまでもなく大友館であり、白い上衣をまとったザビエルに右手を差し出す西洋風の赤い衣裳の人物が、当時のヨーロッパの人々がイメージした大友宗麟(当時21歳)です。

2人の出会いから100年も経っていないヨーロッパの宗教絵画に記録された宗麟。彼は当時最も有名な日本人だったと言えるでしょう。

こうした背景には、宗麟の異国の文化を積極的に取り入れる進取・開明のグローバル精神があり、また、ザビエルとの面会はヨーロッパ世界にその名を知らしめるきっかけとなったばかりでなく、その後の宗麟の人生にも大きな影響を与えました。



〔St..Francis Xavier before Otomo Sorin,Daimyo of Bungo〕 イギリス王室宮廷画家のアンソニー・ヴァン・ダイク作 【ドイツ・ヴァイセンシュタイン城シェーンホルン伯爵コレクション】